



1 25万人が山頂へ

富士山が2013年6月、国連教育科学文化機関(ユネスコ)に世界文化遺産登録されて、4度目の夏山登山シーズンが終わりました。環境省によると、2016年の登山者数(7月1日から9月10日までの集計)は、4登山道(山梨県・吉田口、静岡県・須走口、富士宮口、御殿場口)あわせて、24万8千人とのこと。2008年を境に、それまで20万人前半だった登山者数は30万人を超えるようになりましたが、過去2年間は25万人前後となっています¹⁾。これは、登山は天候に大きく左右されるため、登山者が集中する週末に台風などの悪天候が続くと、人数が大きく減少するのです。

また、2014年秋の御嶽山の噴火に続き、2015年春には箱根山の噴火がありました。富士山が活火山であることがニュースなどでクローズアップされ、富士山も噴火するのではないかと不安感から登山を控える傾向もみられます。

最近、目立ってきたのは、外国人観光客です。300万人を超える五合目までの観光客の中で、外国人では中国人や韓国人が多かったのですが、最近では、アメリカやヨーロッパに加え、東南アジアからの観光客も倍増しています。五合目にある山小屋の経営者に聞

くと、土産物の売店で買い物をする客の9割が外国人ではないかという実感があるといいます。

首都圏から2時間ほどで五合目に到着でき、天候がよければ登山初心者でも山頂に立つことのできる富士山は、自然に入るといふより、多くの人が気軽に來ることのできる観光地といえるでしょう。

登山者数がピーク時より5万人減ったとはいえ、約2カ月間に、25万人が山頂に登る富士山について、ユネスコの諮問機関である国際記念物遺跡会議(イコモス)は、あまりにも多い富士山の登山者を見て、「神聖さ」の担保、環境保全、安全対策の点から、登山者を制限する手



写真1 「日本最高峰」の石碑の前で写真を撮るために頂上でさらに1時間以上待つ

法を検討すべきとの意見を出しています²⁾(写真1)。

これに対し、静岡・山梨両県は、2016年1月にユネスコに提出した「保全状況報告書」³⁾の中で、2018年7月

までに、一日あたりの望ましい登山者数を定めるとしました。2020年の東京五輪では、外国人登山者がさらに増えることも予想されることから、保全（環境）と観光（経済）のバランスをどうとるのか、適正人数をどう決めるのか、登山者数抑制方法などについて議論が続けられています。

2 富士山のごみ

「保全状況報告書」に対し、イコモスからは「登山者が富士山のごみの減少に協力している」とコメントがされました。実際は、世界遺産になったから「ごみが減った」わけではなく、富士山のごみ問題解決には、長い取り組みが既にされてきた歴史があります。

富士山のごみ問題には、登山道のごみと山麓のごみに分けて考えられますが、ここでは誌面の関係上登山道のごみについてお話しします。

富士山の登山道にごみがあふれていたのは、1960年代後半から70年代にさかのぼります。1964年の東京五輪開催にあわせて、富士山の山そのものの観光地化が進みました。より多くの観光客を誘致しようと、同年吉田口五合目までスバルラインが開通し、車で五合目(2,305m)まで簡単に行けるようになりました。当然、五合目に来る観光客、そして登山者も増えていったのです。

当時の登山道の記録や写真をみると、登山者が捨てた空き缶だらけ、まさに至る所ごみだらけだったことがわかります。イタリアの有名な登山家ラインホルト・メスナーが、1976年来日、

富士山に登り「ごみの山」との感想を話したことから、その後、海外の登山家の間で「富士山はごみの山」と話題になったといわれています。

ごみをポイ捨てることに意識を払わないのは登山者だけではありませんでした。山小屋でもごみを埋めるのは至って普通のことでした。富士山では、ここ数年、春に大きな雪崩が起きていて溶けた雪が土砂とともに一気に流れ



写真2 かつて埋められた缶やプラスチックのごみが雪崩で表面に露出（2015年撮影）

下る土石流となるので、山肌の表面が削りとられてしまいます。そこに昔埋められた大量のごみが露出してしまうのです（写真2）。

富士山でも1960年代後半からあまりのひどさに、地元で登山道のごみ拾いが始まりました。1990年代には登山者の意識も向上し、登山道からごみが消えていきました。

3 ごみを出さない工夫

登山道のごみを調べるために、世界遺産登録直後の週末に、吉田口五合目登山道入り口から六合目にかけて歩いたことがあります。このコースは、山頂への登山者だけでなく、五合目に来

た観光客もよく散策で足を延ばすところ。さて、約30分間で拾ったごみは、40個。たばこの吸い殻、ティッシュペーパー、ペットボトル、手袋、飴などお菓子のプラスチック包装などです(写真3)。



写真3 登山道で拾ったごみ(吉田口五合目から六合目)

たばこの吸い殻はあきらかにポイ捨てです。標高は2,000mを超える高地、足元は火山砂礫の小石の登山道では、「どうせ土に還るから」はいいわけになりません。風に舞って、山中に散り、いつまでも残ります。富士山に棲む小動物が誤って食べ、吸い殻に含まれる化学物質の影響も懸念されます。

他のごみの多くは、わざと捨てたというより、風で飛んだ、気づかず落とした、置き忘れたというごみにもみえます。富士登山は、初心者だと登下山でトータル10時間は歩きます。体力を消耗し、夏でも寒さで手がかじかむこともあります。力も入らず、周囲への注意力も落ち、出した「ごみ」が登山道に落ちて気づかず、拾われることなく残るのです。

登山の行動食を準備するとき、そのままリュックに入れるのではなく、無

駄な包装をとる、一つの袋に詰め替えるなど、ひと手間を加えることで、ごみを減らし、うっかりごみを山に置いておくことも防げるでしょう。

飲み物としては、最近スポーツドリンクを用意する人も多くみかけます。出来あいのペットボトルを買うのではなく、自宅で作って水筒を持参すれば、飲んだペットボトルがごみになりません。

余談ですが、富士山では、標高が高くなればなるほど食べ物、飲み物が高くなります。500mL炭酸飲料なら、コンビニエンスストアで買えば150円、山小屋で買えば300円、頂上の自動販売機では500円です(写真4)。



写真4 山頂に並ぶ自動販売機(景観に配慮して赤ではなく茶色に塗られている)

家でひと手間かけて、出すごみを少なくすれば、うっかり山で落とすごみも、持ち帰るごみも少なくて済むのです。

ちなみに登山道で拾ったごみの中で「こんなもの」と驚くかもしれないごみに、箱入りスニーカーがあります。このスニーカーはソールが剥がれています。実は、登山中に靴のゴム底が剥がれて困っている登山者をよく見かけるのです。登山靴を何年かぶりに履き、劣化したゴム底が歩いているうちに剥

がれてしまうケースです。「もったいない」が「ごみ」にならないように事前にチェックしたいもの。山小屋で買えますがその登山靴は高い買い物です。

4 頂上に立たない富士登山

富士登山といえば、五合目から頂上へと考えがちですが、富士山を歩く楽しみ方は他にもあります⁴⁾。

富士山は、体積約 400km³と日本でも最大級の火山であり、裾野の広さが周囲 150km の独立峰です。

何度も繰り返された噴火の後にできた森は、青木ヶ原樹海が有名ですが、スバルライン三合目から五合目奥庭に続くトレッキングルートでも噴火の後にできた森を楽しむことができます。富士宮口の五合目から六合目を通り、1707年の噴火でできた宝永火口（富士山頂の火口よりも大きい）の中を歩くのも火山を体感できる登山です。

富士山の美しい姿を眺める登山もよいものです。標高 3,000 m を越える山は日本に 23 あります。富士山は 3,776 m、次が北岳 3,195 m で、富士山が他の山より断トツに高い⁵⁾。ということは、周囲の山に



写真5 雪頭ヶ岳から富士山と西湖を臨む

登れば、美しい富士山の姿を眺めながらの登山が楽しめるというわけです(写真5)。

5 ごみはどこに持ち帰り？

富士山は世界有数の観光地です。日本人にとって「ごみの持ち帰り」は当たり前ですが、遠方からの登山客や観光客はごみをどこに持ち帰ればよいのでしょうか。富士山では、五合目や登山道だけでなく、ふもとの公共施設や観光施設にもごみ箱はないといっただよいでしょう。ごみ箱を探している外国人もよく見かけます。ごみ箱がないため、トイレの隅に置かれていることも多いのです。海外や遠方から来た登山客や観光客は、持ち帰り先が自宅ではなく、コンビニエンスストア、都心の駅、高速道路のサービスエリアにあるごみ箱です。増加が予想される大勢の観光客の「ごみはどこまで持ち帰るのか」が、今後の課題の一つです。

(廃棄物資源循環学会誌 第26巻 第3号 pp.207-214 (2015) に関連記事掲載)

参考文献

- 1) 環境省：富士山登山者数調査結果
http://www.env.go.jp/park/fujihakone/data/fuji_tozansha.html (閲覧日：2016年11月9日)
- 2) UNESCO世界遺産：富士山—信仰の対象と芸術の源泉 (Fujisan, sacred place and source of artistic inspiration)
<http://whc.unesco.org/en/list/1418> (閲覧日：2016年11月9日)
- 3) 保全状況報告書に対するイコモス意見書
<http://whc.unesco.org/archive/2016/whc16-40com-7B-en.pdf> (閲覧日：2016年11月9日)
- 4) 気象庁：富士山の体積
http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/314_Fujisan/314_index.html (閲覧日：2016年11月9日)
- 5) 国土地理院：日本の山岳標高
<http://www.gsi.go.jp/KOKUJYOHO/MOUNTAIN/mountain.html> (閲覧日：2016年11月9日)